第一部

戦争中の杉並

杉並の戦中生活

「大日本国防婦人会杉並第三分会」アルバムより　〈提供　井口金男さん〉

戦災体験記

●上荻二丁目
石川　竣
（明治三二年生まれ）

家族（母、妻、一男、三男、二女、三女）は義兄の郷里（山梨県甲府の一駅先の田舎家）に疎開し、長男（中学生）は学童疎開で群馬県別所へ、私と長女二人だけ自宅（現在と同じ杉並区上荻二丁目）に住し、私は農業会（農協の前身）に勤務、長女は杉並立正高女二年生で、立川の飛行機工場に勤労動員に出かけていた。

昭和二〇年四月二五日夜、母や子の疎開先（山梨）へ衣類、図書等を持って行くため私と長女と二人で新宿駅で列車を待ったが、すごい人で乗り切れず、最終列車となった。その時、空襲警報が鳴り出し、まもなく爆弾の攻撃が始まり、都電終点のガード近くにエレクトロン焼夷弾の黄色の大きいのが落ち、目の前には焼夷弾がチューリップの花が咲いたように落ち、初めのうちは土砂でそれを消していたが、はげしくなりとても間に合わない。もうここにいては危険だというので、皆駅構内から西口広場（現在のバスターミナル）へ行く。防空壕はたくさんあったが、余り大きいのはなく粗末なものだった。取りあえず背負ってきた荷物（衣類、辞書等）をここに置き様子を見ることとしたが、次第に烈しくなる。前方の空にB29が多数旋回しながらこちらに向かって来る。他の一機は火だるまになって落ちてゆく。頭の上からジュラルミンが落ちてきた。ここも危険だと十数人一団となり、駅の防火用水も少なく泥水のようだがそれを頭巾にかけ、夢中で駅の地下道を抜け、前回焼け残った駅の東北方の風呂屋のタイル張の蔭に身を寄せる。火の粉が吹雪のようにとんでくるので、お互いに消し合った。三、四時間の後、東の空が明るくなって来た。やっと解除の発令が出て皆ホッとした。

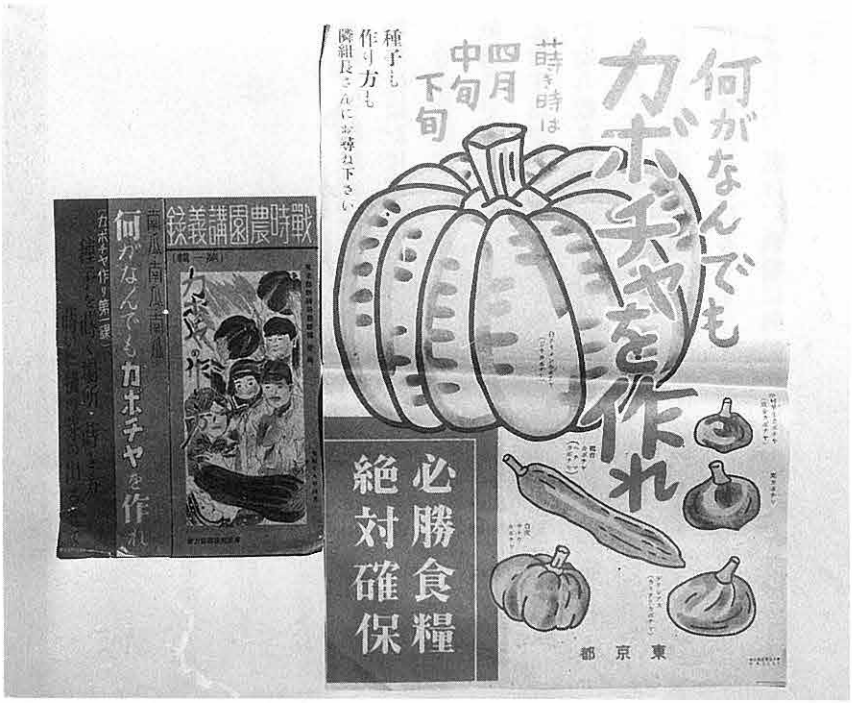
防空壕に置いてきた荷物はいかにと戻って見たところ、衣類は丸焼け、辞書は半分位くすぶっていた。もう役に立たない。甚だ残念。汽車に乗れず新宿から荻窪の自宅まで徒歩で帰って来た。途中中野辺りは焼野原、電柱はまだくすぶっている。目をいためて帰宅したのである。

また、その後勤めの仲間（男性七〇歳）が風邪がもとで亡くなった。この方も長女（高校生）と二人だけ（家族は九州に住み、なかなか出て来られない）で近所の方も余り懇意で

なく、私が葬儀の世話をせざるを得ないため葬儀屋にいったが、棺も板が端切れで中が見えるような粗末なものだし、葬儀屋の主人がリヤカーに乗せ火葬場（高円寺）に運ぶ始末、燃料を持って来いといわれ困った。

あるいはまた、食料不足で国分寺の支線（西武多摩湖線）方面に買出しに出かけたが、電車は満員で、ようやく乗ったという程度で危険な状態であった。とにかく戦争が主であるから、人は減り、あらゆる物資の生産は止まるのだから何でも不足になる訳である。

とにかくもう戦争はやるべきでない。



食糧確保奨励ポスター　〈区立郷土博物館所蔵〉

戦争の中の青春

●世田谷区世田谷三丁目
石田　晶子
（昭和元年生まれ）

私が小学校へ入学したころ、日中戦争が始まっておりました。

女学校三年の一二月八日に、真珠湾攻撃があり、第二次世界大戦になってしまいました。まだ一四歳位の私には戦争がどんなものか分かりませんでした。

物資の統制がきびしくなり、近所の餅菓子屋でこれで最後という大福を買って食べじまいをした思い出があります。

学徒動員で四年の一学期、駒込にある大蔵省印刷局へ勤労奉仕に行きました。弾丸切手（現在のスピードくじ）といったものの印刷ミスを見つける作業でした。機械と印刷の油の臭い汗を拭きながら働きました。学校の勉強は無し。

私の父は職業軍人をしていた時があり、白紙の召集令状でコッソリと出征致しました。一度目は満州の酷寒へ、二度目はフィリピンのミンダナオ島でした。

昭和二〇年三月九日の東京下町の大空襲。本郷の親戚を見舞い焼跡のものすごさに唖然とし、避難先に行く途中、荷車に焼残りの物を積み歩いて行く姿がとても痛々しかった。夕暮時、大塚駅ホームから見た焼野原。再び燃え上がる炎。建物の骨組だけが黒く浮び、淋しさと悔しさで一杯でした。

灯火管制で、一点を丸く照らす電灯の下で、家族が不安な気持ちで集まり、つくろい物、書き物等をしていました。こんな生活がいつまで続くのか、勝つ事が出来るのか、口に出したら殺されるかもしれない時代でしたから……。

五月二五日、今度は山の手の大空襲が来ました。とうとう杉並の和田本町、堀之内、和田小学校もやられました。その日は空襲警報が出るともうすぐ、あのB29の轟音が聞こえて来ました。私は、戦場に向かう武士のように身振いを感じました。

真黒な空に、真赤な焼夷弾が降り夜空を染める花火のようでした。みるみる頭上に落下してくる爆弾、無我夢中で防火用水の水を防空頭巾の上からジャブジャブと浴びました。変に度胸が座り、『来るなら来い』という気持ちでした。家の前の和田小学校に落下し、たちまち燃え上り、火が校庭を這って我が家の方へやって来ます。火の勢いで風がおこり、物が

飛んで来たり、飛火したりです。防火団の人が『バケツで水をかけろ』と叫びますが、そんな事しても火のすごさにはかないませんでした。家の裏に『ドスン――』と大きな音がして爆弾が落ちたのです。でも幸せな事に不発だったのです。お蔭で焼け残る事が出来ました。

夜が白白明けるころには下火となり、いつしか爆音も聞こえませんでした。近くの野原に畳一帖、食器戸棚、ぬかみそ樽等、夢中で運んでしまい、火事場の力と後で笑ってしまいました。夜が明けたころ、家の前の道路は被災者の方で一杯でした。新宿にいた叔父たちも焼出され、杉並まで必死で歩いて来ました。本当に命からがらだったようです。

少しばかりの畠をかりてトウモロコシや芋、南瓜等野菜作りで、少ない配給米でしゃぶしゃぶおじやの主食でした。水分で一時の満腹感を味わうだけですからいつも物足りない思いでした。

戦況は、本土上陸の噂が流れ、竹槍で一人が一人を殺して、自分も死ぬと真剣に考えたものでした。八月に入り広島、長崎と原爆が投下され、異常なものを感じました。私自身の気持ちも限界に近かったと思います。

八月一五日終戦

朝から飛行機の爆音も無く、何となく静かな雰囲気が不気味でした。ラジオで玉音放送が正午にあるということで、私たちは行水で身を清めラジオの前で座りました。

おもむろに聞こえる天皇陛下のお声、難しいお言葉でやっと耳に入った『耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍び』と聞こえました。何か頭が空白になり、その内涙が出てなりませんでした。母に戦争が終わったらしいと言われ一瞬ホッとし、明るい夜が来る、父や弟妹が疎開先から帰って来る。着たい物、食べたい物が、頭の中を駆けめぐりました。でも日本は降参したのだから、アメリカ兵が上陸して来ると、若い娘は危ないとか、母たちはとても心配しておりました。でも戦争が終わったのだという解放感はありました。

いよいよマッカーサー元帥が日本に来るという前日、皇居二重橋まで行きました。日本人として何か自然に拝みに行ったようです。玉砂利に座り手を合わせると涙が止まりませんでした。たくさんの方が来て、手を合わせておりました。

お蔭様で私たちは焼け残り、周りの方たちも焼け跡にバラック生活を一生懸命やっておられました。父も無事にミンダナオ島最後の引き上げ船で帰国出来、弟妹も疎開からもどり、苦しいながらも幸せな生活がもどって参りました。

現在の世界情勢、日本の立場等、絶対戦争は起こさないで下さい。地球・人類が大事だと思えば戦争は出来ませんのに。

私たちが体験した苦しみは、二度とないことを信じて、これからの人生を送りたいと思います。

戦中の生活体験

●阿佐谷北三丁目
岩本　清子
（大正二年生まれ）

昭和一一年二月二六日、台湾の高雄よりあこがれの東京へ転勤で参りました。ちょうど、二・二六事件の時、阿佐ケ谷駅は小さな田舎と思いました。長男六か月から各年ごとに五人授かり、人手も借りずにすくすくと育てさせていただきました。

ちょうど五人目の女子が生まれます時、空襲が激しくなって参りましたので、会社ごと疎開のため、愛知県の西尾へ家族七人で引越しました。物資も豊富で、ほしい物はひととおりありまして、よろこんでおりました。ところが末の子が生まれて四〇日目に、濃尾平野の震源地に近いところあたりに大地震があり、家の中にいられなく、ちょうどその時、私が赤ん坊を抱き起こした所へ後ろのタンスの上段が縦に落ちて来まして、すんでの差で頭をつぶすところでした。今思ってもゾッとします。空襲の最中ですが、余震のため外で一か月寝ました。空襲と余震であちこち死者や家屋倒壊があり、私どもの家もとても立派でしたが、住むことが出来なくなり知事様にお願いしまして、空襲の激しい東京に再び帰って参りました。

毎日ますます空襲がひどく、時限爆弾がはげしくなり、昭和一九年三月の空襲でいよいよ防空壕にいられなくなりました。真上に茄子色の爆弾が破裂し、近くの方からの「そーらにげろ…」という声に乳母車の中に一ぱいつめこみ、一生懸命日大高校のテニスコートの所へ走りました。日大には大きな大砲があり、ドドドーンとうちますが、敵機にはほど遠くてあたりません。そのうちに油脂焼夷弾が雨あられと降って来まして、私どもヒバの塀に伏せて敵の行ったのを見て井草の堤防まで逃げました。衣服につくと焼けます。井草は土手でした。暗闇から東方の空を見ると、池袋、我が家が焼けているように思いました。

夜明けになると明日はどこへ行こうかしら、家も焼けて家族七人、故郷へ帰っても受け入れてくれる所はなし等々、重い足を引っぱりながら帰って来ましたところ、屋根もチャンとありました。ほんとうにうれし涙が流れました。庭を見ますと、焼け落ちた近くの消し炭（カラケシ）が飛んできて大

きなのが一杯ありました。近くの焼け跡（今の新生パン工場）へ行きますと、床の枕木があちこち焔（ほのお）を出してもえていました。尼寺の電信柱へ飛び火して、プイッともえだすのでビックリしました。今思っても皆無事でよかったと感激しております。それから、町内にはどちらにも赤ん坊はいませんから貴女の所も考えて下さいとのことで、上二人は学童疎開させていただいておりますので、区役所にお願いしまして、母子五世帯一緒で長野の木島のお寺（照明寺）様へ、主人だけ家に残り、下二人と私で御世話になりました。三か所にわかれ、それぞれ小さい子供たち元気でねーと祈りつつ。

私どもは子供をお寺に置いて田舎の農家の方を頼りに物資を持って毎日出かけ、交換条件で少しずついただきに参りました。清水でオムツを洗濯し、鍋等も山の流れで洗い、スイカ、瓜など冷たくして一応のんびりさせていただきました。

それから敗戦になり、一〇月にそれぞれ苦労してやっと一家七人が我が家へ落ち着く事が出来ました。又々食糧が少なく、家に子供を残し川越まで毎日六貫（一貫＝三七五〇グラム）のサツマ芋を背負って、鷺宮から家まで歩いて来たこともありました。

今思えば、継ぎだらけの着物、洋服、穴あきの運動靴、石鹸も代用品でなかなかよく落ちないし、きれいになりません。盥（たらい）でごしごし手でしぼって朝早くから天候を見て干しても、厚手のシャツ類は一日でかわく事がむずかしいのです。また、私たちは台湾のような温かい国から帰って参りました故衣類も少なく、配給制度でして、その上綿類は供出して下さいとのこと故、立派な座ブトンを出しました。鉄類、金（きん）等々。そして小さな火鉢二つで七人車座になって、寒い冬を夜はアンカにタドンを入れて寝ました。お金も封鎖でなかなか出すことが出来ません。夫婦で買出しに行ってやっとでした。でも病気もしないで細っていましたが、お蔭様で全員無事。今日ある事が何よりの宝物だと喜んでおります。

戦死なされました御家族様、ほんとうにお気の毒だといつもお察しいたしております。

戦時下の日常生活より、〝一区民の思い出〟

●高井戸西一丁目
遠藤　寛
（昭和五年生まれ）

日時は記憶が薄らいで、わからないが、こういう状況だったという出来事を羅列してみたい。

当時、私の家は荻窪二丁目の川南で父と私が東京に残り、他の家族は学童疎開、縁故疎開で四散していた（私は、旧制中学校三年で勤労動員に出動していた）。

◎防空壕のこと

最初のころは、警戒警報が鳴り、しばらくしてから空襲警報が鳴ったが、後では順序通りにゆかず、いきなり空襲警報が鳴り出し、空を見上げると、はるか上空をB29が銀色に光って、悠々と飛んでいて、あわてて防空壕に避難した。防空壕は裏庭の隅に一メートル半位に掘り下げた半地下式で、あり合せの木材で内部を固め、約三畳位の広さで、天井や周囲は土を盛り上げて、外部からみると土饅頭の泥の山である。最初は警報の出る度に眠いのをこらえて起き、壕から出たり、入ったりしていて疲れてしまい、最後には眠気に負けて避難も面倒くさくなり、どうにでもなれとばかり、寝こんでしまった。そして終わりには、生活用具を持ちこんでの壕内生活が始まった。

終戦も間近なある日、敵艦載攻撃機が超低空で襲いかかり、機銃掃射をした。防空壕に逃げこんだ父と私の頭の間の泥の壁に耳もとをビッシィと音がして泥が崩れ落ちた。後でみると、敵機の機関砲の弾であった。約一三センチ位の細長いものであった。まさに間一髪で助かったわけである。戦後、記念品として、その弾を持っていたが、いつとはなしになくなった。

◎雑炊食堂のこと

国民食堂の別名である。強制疎開でこわされ空地となった荻窪駅の南口の一角に稲葉屋という大きな蕎麦屋があった。川南からは、一番近い食堂なので、よくバケツを持って、買いにいった。雑炊（野菜や魚が多く、汁が多くて、だぼだぼしていたもの）やウドン（ウドンは煮こまれて、形がくずれ、どろどろしていた）を行列して食べたり、それを買ってきて、

家に持ち帰り他のものを追加して入れたりしてよく食べたものだ。当時の重要な主食で、中々の美味で、大変なご馳走であった。それも早く行かないと品切れになってしまう。なにしろ食糧不足で、なぜか家に正麩がたくさんあったので味をつけ煮て食べた。

◎火の見櫓のこと

当時、川南バス通りの郵便局の前に、火の見下というバス停があり、春日神社へ抜ける道の角にKさんという鳶職の親方が住んでいて、その後に警防団の資材置場があり、その上に約三〇メートルの火の見櫓があった。隣組や警防団が、よくそこに集合して、防空演習等をしたりしていた。一番上に半鐘があったが、鉄の供出でいつとはなしに無くなり、鉄塔だけとなったが、付近では一番高い施設なので、なにかにつけ、隣組、町会、警防団等多勢の人々がつめかけたものだ。四、五月の空襲の時などは櫓の上から「燃えている、真赤になっている」と悲痛な声で誰かが、大声で叫んでいるのを聞いた。戦後、ややしばらくしてから火の見櫓は解体され、火の見下という呼称もいつとはなしに消え去ってしまった。

◎空襲のこと

三月の下町大空襲以後、幾度の大空襲があり、真赤な夜空に銀色のB29の機影をみ、雨あられのごとき爆弾、焼夷弾の落下してくるのをみたが、当時の川南界隈の様子を述べてみよう。

四谷、新宿方面の空襲の時は、郵便局の二階から見て、荻外荘の黒々とした森の向こうに空が真赤になって燃えて、時々、火の手があがるのがよくわかり、非常に不安な気持ちでどうすることも出来ず、唯、皆、うろうろして、防空壕から出たり入ったりしているだけで、なす術もなかった。渋谷や京浜地帯の空襲の時は、郵便局の二階からみて、中道寺の杉木立の向こうに、全体が薄赤く明るくなってみえた。なにしろ川南辺りは高台にあり、周囲は今と違い畠や野原、雑木林が多く、視界が開けていた。はるか上空をB29が悠々と飛び、味方の飛行機は足元にも近づけず、高射砲も、打上げ花火のように音だけは勇ましく、ほとんど命中せず、下の方で破裂しているだけで、見ている私たちも腹だたしく、情けなかった。

川南商店街の通り沿いにも、焼夷弾が落ち、数軒の家が燃え、被災した（現在のバス停西田小入口から荻窪一丁目にかけての東側）。この時に西田小学校も焼夷弾により被災、校舎の一部が炎上したこと。

郵便局の斜め向かい側のY家に爆弾が落下、不発だったのが幸いだったが、それでも大きな穴があき、御影石をコンクリートで固定した側溝の蓋が全部、浮き上がってしまった威力と、近所のガラスや、建具、建物が破壊されたこと。

空爆の後には、機関砲の銃弾や爆弾の炸裂した後のギザギザの鋭い鉄片等がたくさん散乱していた。荻窪二丁目の泉湯

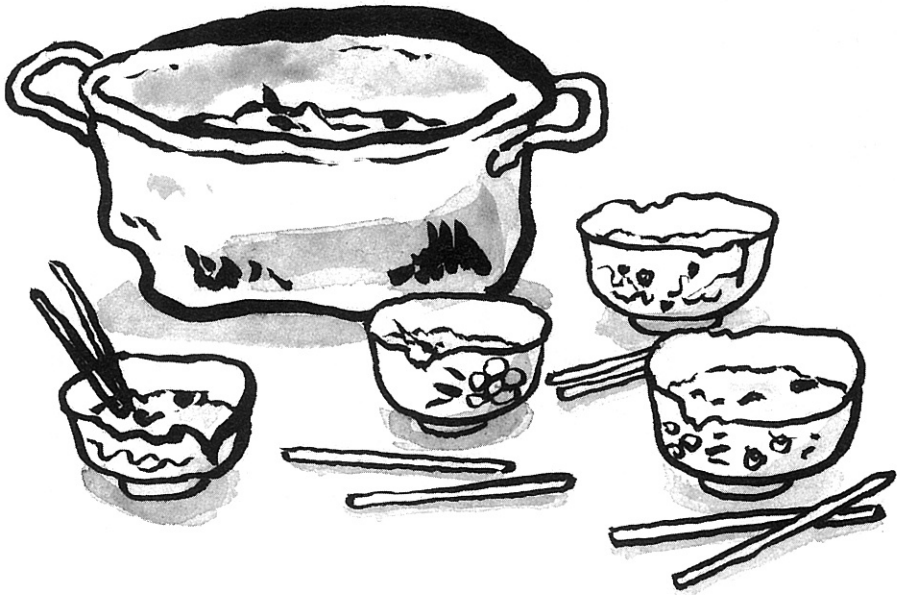
に西田小学校に駐留していた兵隊さんが、夕方になると隊列をつくり入浴に来るのをよく見受けた。中年、老年の人がほとんどで、なんとなくあわれっぽく、かわいそうにみえた。話によると西田小に高射砲の陣地をつくっているとかいうことを聞いたが、真偽の程は知らない。

◎焼跡整理作業のこと

焼跡整理に動員された私は、荻窪から青梅街道を歩いて、淀橋の成子坂あたりまで行き作業に従事したが、その状況は悲惨なものであった。電線からぶらさがったままの真黒に焼けた電柱、焼けただれた残骸の中に散在する炭化した遺体、煙にまかれて亡くなった蠟人形のような窒息遺体、斯様な無念、気の毒な遺骸をトラックに収容する作業、辛く、苦しかった。無我夢中だった。

成子坂の途中の米屋かなにかの、焼け崩れた倉庫の中に入って、水を被り、散乱している麻袋の中から大豆をすくえるだけすくって、こわれた花瓶の中に入れて持ち帰り、煮込んで食べたこと。お蔭で数日間食べたが、水をかぶったためにか、二、三日間、水に浸してさらしてみたが、中々臭気がとれずまいった。

焼跡整理は、今、想い出しても、まさに、地獄と餓鬼道の様相だった。そして、恐怖の感情は全くなかった。



価格一覧

・葱	一把	63銭
・こんにゃく	一枚	5銭
・玉子	一個	7銭
・豆もやし・牛蒡小六、七本 ほうれん草・三寸人参六ケ		93銭
・ほうれん草・豆もやし		90銭
・空俵（防空用）	一枚	20銭
・防毒面	一ケ	4円50銭
・海苔	一帖	45銭
・うずら豆	一合	4銭7厘
・牛肉		1円42銭
・切干大根	百匁	20銭
・白菜・半平・葱四、五本、豆もやし		64銭
・日の丸	一枚	3円
・葱・ほうれん草・人参・蜜柑		1円45銭
・牛蒡・白菜		70銭
・白菜・ほうれん草		56銭
・玉子	十八個	1円28銭
・脱脂綿券	一枚	26銭
・弾丸切手	十枚	20円
・牛肉		1円45銭
・林檎	十個	93銭
・ウド・牛蒡・ほうれん草		75銭
・肥料（サナギ粉）	一袋	27銭
・肥料（皮粉）	一袋	23銭
・肥料（石灰）	一袋	17銭
・肥料（発酵鶏糞）	一袋	38銭
・防空用樽		6円50銭
・玉子	七個	58銭
・牛肉		1円20銭
・ウド三本・ほうれん草		58銭
・人参・ほうれん草		41銭
・玉子	一個	7銭
・納豆	一本	5銭
・ウド		30銭
・焼竹輪	一本	16銭
・ウド・豆もやし・三葉		82銭
・ウド・蕗		90銭
・肉		80銭
・三葉・さやえんどう・大根		50銭
・茄子苗	一本	6銭
・トマト苗	一本	5銭
・胡瓜苗	一本	7銭
・焼竹輪	一本	15銭
・鳶口	一本	2円20銭
・かます	一枚	25銭
・木炭	六俵	18円
・豆炭	十袋	15円50銭
・乾うどん	一把	17銭
・若芽	二十匁	22銭
・鉄兜	一ケ	6円50銭
・火叩棒	一本	1円20銭
・がんどう	一個	3円80銭
・空俵	一枚	25銭
・生菓子	一ケ	5銭
・パン粉		9銭
・海苔	一帖	45銭
・竹輪麩	一本	5銭
・梨	二ツ	13銭
・ハム	一本	1円3銭
・全フス、ネル		1円18銭
・普通ネル		1円14銭
・練炭	一袋	1円22銭
・削鰹節	一袋	97銭
・天婦羅	一ケ	10銭
・あさり	二百匁	14銭
・縫い針	三本	1銭
・ロウソク		8銭
・玉葱苗	一把	50銭

（栗原金之助氏所有　「第39組隣組帳　昭和18年2月」より抜粋）